

Y 2008 No.46



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

寄贈本紹介



○耐風雪燦人生
～5期20年。文化が
香る柳川の基礎を築
いた文学市長古賀杉
夫が綴る軌跡とロマ
ンの一代記。

元柳川市長
古賀杉夫

目次を見ただけでも古賀杉夫市長のロマンにとむ生涯が伺われる。昭和34年、激しい選挙戦を経て当選。市民本位の明るい清潔な市政を希求して登庁。かえりみて揺籃の幼、少、青年期の回想。旧制福岡時代は文芸部員。のちに直木賞作家として高名の檀一雄の一編をボツにした思い出。九大卒業後、理想に燃えて新天地満州へ。夢敗れて敗戦、引き揚げ。転機。大川市助役。市長就任後は白秋生家保存。水郷柳川へ、広松係長の直訴を受けて、環境、まちづくりへ奮闘。炎の男、作家檀一雄との交友。古賀政男先生との出会い。令息一成さんは「生涯青年の人」であったと父親の人となり回想されているが、平成八年七月、年齢88歳の祝を目前にして逝去。

麻生渡福岡県知事は、「柳川市の発展はその豊かな歴史風土を活かした教育、文化の振興にあるとの信念からの市政への尽力」を礼讃。当時の助役相浦敬次郎先生は清廉潔癖、情熱をかたむけての市政施行者であったことを追憶されている。



東京で“有薫”酒場経営の社長高山亀雄さんからダンボール箱一杯、わが自分史図書館への寄贈、私はよろこんで頂戴することにした。高山社長さんは筑後三潆の出身、作家壇一雄、劇作家栗原一登氏らに親しまれた方。それだけに寄贈本には、筑後一円にかかわる出版物が多数。

そのなかの一冊。元柳川市長古賀杉夫氏の一代記を紹介したい。扉をひらくと「謹呈、高山亀雄大兄、平成十八年九月二十三日、衆議院議員古賀一成」と墨書。題字は古賀杉夫自身きちんとした実直な人柄をしのばせる筆跡。

受贈図書紹介 34

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

ルソン島野戦病院全滅の記 …… 西井 弘之 岡山県
ニューギニア戦歌集 …… 内貴 直次 神奈川県
有明海の今昔 …… 近藤 潤三 柳川市
研究週報みつとも …… 末継敬一郎 立花町

突きの進 …… 松見 正宣 柳川市
歌集 パン皿 …… 宮田 久子 北九州市
歌集 野紺菊 …… 河口美沙子 大牟田市
生命への祈り …… 後藤 敦子 八女市
美しき翼 …… 原口 昌宏 上陽町
朝鮮全土を歩いた日本人 …… 河田 宏



○追憶

清原 正憲

著者清原さんは元福岡県警察官、現在杵築市に住み、絵や書を通じ、環境保全活動に精励、また国東の里山を草刈り、植樹などで森づくりにも取りくまれるすばらしいライフスタイルに生きられているお方。

「追憶」と題されたこの書はご尊父を（昭和19年7月、比島沖にて満泰丸乗船中、撃沈、戦死）失われたの追憶鎮魂の意をこめて編まれたものである。父上戦死の報が届けられたとき、清原さんはまだ幼く六歳。のちに叔父を「お父さん」と呼ばねばならない境遇になられたときの思い出など切々と胸を打つ。



○歌集 “あめんぼう”

日刈 琢史

手を上げて蜻蛉のとどく日暮れ道柳川近し一里塚見ゆ
冬の雲流れて留守の気遣わる子供残せし日帰りの旅
大陸に昔字びしロシア語は今も忘れず故郷に老ゆ
芽ぶきたる柳の垂れて水門の由来刻みし石碑隠るる
夕焼けて一村一寺の鐘の鳴る日々好日の暮れて行くなか

（青磁社刊）山門瀬高在住



○またきてくれんの

黒木タツヨ

「私は明治44年11月14日、この美しい八女の地上妻祈禱院で生まれました。89歳で21世紀を迎える事になります」との書きだし、祖父祖母の思い出から、祖父経営の野田銀行のこと、父の人となり、八女高女時代から京都女専卒後、黒木政斗との結婚。このタツヨさんの自分史は令息の黒木久夫さんが存命中、母親から語られたことを書きとめられた、いわば聞き書きによる「自分史」といえる一冊。表題の『またきてくれんの』は横浜へ帰る久夫さんをエレベータ前まで送ってくれたときの最後の言葉によるものとのこと。母親をしのばれた追憶の記でもある。



○歌集 鯛雲

立花 進

夕焼けのつらなるはての地の果てになお炎え残るもの鯛雲
杖なしで公園二周す法師蟬つくづく命われいとおしむ
突然自分の終末に気づかざるさはさりながら見事な夕焼け
気の遠くなる昔ゆえへチカにて焼きしリンゴの香りも忘る
いちどだけ父と鮎釣りしたること釣れずにもどる夕焼けなども

（長女初井和子さんの編集による遺稿歌集）

編集掌記

このように区分した旧暦は秋の季節を一層深く感じとらせる。日に日に虫の音もおとろえ、夜長、しかし読書には好季である。▼10月12日、村出身千葉在住の自分史詩人山浦欣一さん帰郷、仁田原石義前村議長宅で歓迎の一夜。欣ちゃんは小学五年生のとき、俳句を詠んだ。「炭窯の煙ふたすじ春の山」。担任の蓮尾秀雄先生と肥後の相良観音に吟行遠足。この一句を先生賞讃。「蓮尾先生との出会いがなければ、今日の齢まで、駄文を書く趣味を持ち得たか、どうか判らない」と回顧。自分史詩人は同伴の夫人をこのようにも詠んでいる。「その時はおのが心をたぎらせて秋の寂しさ誘う女よ」奥さんはだまって

▼旧暦では、10月9日から「寒露」という節気に入る。その前は「秋分節」、そのまた前は「白露」、秋を

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧いただけます。http://www.jibunshitosyokan

微笑。▼父親を早く失ない、中学生の身で一家の主となって、ロクに学校にも行けず炭焼一途に暮らさざるを得なかったと回想の前村議長のココロシさん。「俺も自分史一代記を書いておくか」。友情、酒くみあつての談義は秋深し。▼東京“有薫”酒場社長高山龜雄さんより、めずらしい本、多数、ご献本くださいました。厚く御礼申しあげます。
（自分史図書館長 椎笠猛）